

2005 年度生態史プロジェクト報告書

## 森林・農業班

## 南ラオス・チャンパサック県、国道 23 号線沿いの村落における農業と森林利用に関する諸実践の研究

中田友子（シリントーン人類学センター）

キーワード：南ラオス、実践、変化、傾向

Study on practices concerning agriculture and forest use in the villages along the National Road 23 in  
Champasak Province, Southern Laos

Tomoko Nakata (Princess Maha Chakri Sirindhorn Anthropology Centre)

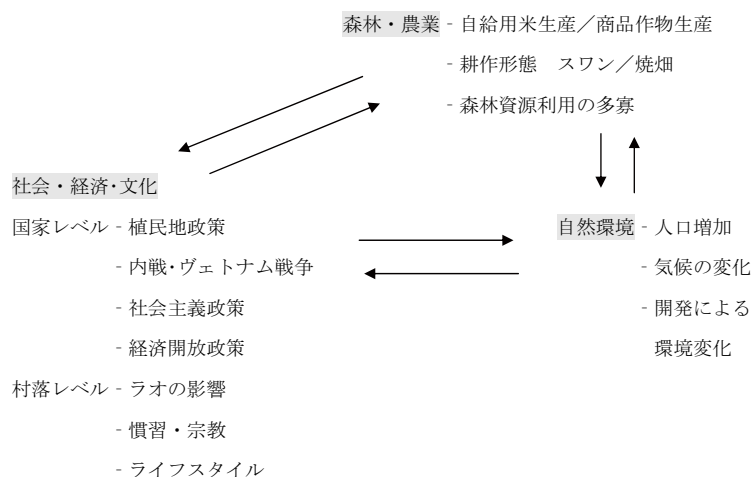
Keywords: Southern Laos, practices, change, disposition

## 1. はじめに

## 1) 問題の所在

本研究は、南ラオスの一地域において、森林利用や農業のあり方、社会・経済状況や環境の変化が、どのような相互作用のなかで起こってきたのかに注目しながら、特に、自然環境によって条件づけられ、国家や地域の制度によって制限されるなかで、人々がこれらにどう反応し、また折衝してきたかという営みを明らかにすることを目的とする。研究対象であるチャンパサック県の国道 23 号線が走る地域は、他県から移動してきた少数民族の村が多いことで知られている。国道 23 号線はラオス第三の町パクセと、ポロヴェン高原にあるパクソーンとを結んでいる。ポロヴェン高原はその名が示すとおり、もともとポロヴェン、あるいはラヴェンと呼ばれる集団が多く住んでいたが、現在のように多様な集団の村が作られたのは、それほど古いことではない。パクセ自体、フランス植民地政府によって、チャンパサックに代わる行政の中心とされ、これとコーヒー等のプランテーションによって開発が行われたポロヴェン高原をつなぐ 23 号線も彼らによって作られた。その後、植民地政策のもとで、さまざまな集団の村がこの地域に移り住んだ。さらにヴェトナム戦争、ラオス内戦中にも戦火を逃れるために、難民となった人々がセコーンやサラワンなどからやってきた。こうして、19 世紀末から 20 世紀後半にかけての約 100 年の間に、この地域は異なる集団の村によってモザイク状に形成された地域となった。

もともと、非常に人口密度が低い地域に、徐々に人々が国道沿いという利便性や、また焼畑や畑を作るための豊富な土地を求めて移り住み、村が作られていった。ポロヴェン高原は既に述べたように、フランス植民地時代から開発が行われ、コーヒーや茶など商品作物栽培が行われていたため、独立後もこの地域の農業にはその影響が色濃く見られる。また、パクセから近く交通の便もよいことで、国家レベルの社会・経済変化の影響も辺境地域に比べて受けやすいであろうと考えられる。さらには、さまざまな民族集団が集まっているため、彼らの間で異なる社会・文化的背景が、農業や森林利用、さらには環境との関わり方に影響を与えていることは十分に考えられる。以上の問題意識を図式化すると以下（右図：編集者注）のとおりになる。



## 2) これまでの調査の概要

2004 年は国道 23 号線沿いの Km 11 から Km 19 までの 15 村、2005 年は Km 20 から Km 48 までの 16 村をまわり、計 31 村で聞き取りを中心としてデータを収集した。これら 31 村の特徴を表にまとめたので、これを参照されたい。

## 2. 調査の結果と分析

現在までの調査で得られたデータから、全体的にいえることは、村落間に大きな多様性が見られることである。これまで調査した村は約 30 数キロの間にあり、それほど広い地域にまたがっているわけではない。それにもかかわらず、それぞれの生業をはじめ、ライフスタイルなどに大きな差異が見られる。以下、3 つの項目に分けて論じる。

### 1) 生産作物

生業についていえば、3 つのタイプに大きく分けることができる。焼畑での米作りの村、米と商品作物両方を作っている村、そしてほとんど商品作物のみを作る村である。この違いが生まれる要因としては複数挙げることができる。一つは、村の歴史に関する。ポロヴェン高原に近ければ近いほど、商品作物のみを作る村が増える。これは、既に述べたとおり、この地域がフランス植民地政府によって開発され、コーヒーを中心とする商品作物の導入が早くに始まったからである。こうしたコーヒー栽培の歴史の古い村は、例えば、コーヒーの値が下がったからといって、自家消費用の米栽培に戻ることはない。別の種類のコーヒーを導入するか、他の商品作物を探し、これを栽培するほうを選択する。この地域ではコーヒーはかつてロブスタ種がほとんどだったが、この 3、4 年、収量がどの村でも極端におちており、徐々にアラビカ種に切り換える世帯が増えつつある。また、最近では、マツクサバーという野菜を栽培する世帯が Km 45 から 48 の村で増加している。これ以外では、プーキャオと呼ばれる嗜好用の植物や、茶や家畜などが、害虫の被害を受けやすく、値段の変動の大きいコーヒーを補完するものとなる。

ポロヴェン高原からバクセ側の下ってくると、米作りと商品作物栽培を平行して行っている村が大勢を占めるようになる。ただし、米と商品作物の比重は村によって異なる。多くはスワンと呼ばれる畑に、パイナップルやケーム（ほうきの材料になる植物）に混ぜて自家消費用の米を植えるのであるが、1 年分の米を作ることのできる世帯はほとんどなく、1 年のうち数ヶ月は商品作物を売った収入で、米を買って食べることになる。これらの村はもともとは自家消費用の米を中心に栽培していたケースが多く、商品作物の導入の時期、また米と商品作物を混ぜて植えるようになった時期も異なる。国道沿いに位置し、バクセの市場からも近いこの地域の村は比較的古くから農作物を市場で売っていたということは、Km 11 の村の人々からも聞いている。商品作物として作ったものでは必ずしもなくとも、現金収入が必要なときに果物などを売るということはこの地域のどの世帯でも行っていることである。ただし、最初から売ることを目的として作物を栽培するということは、どの村あるいは世帯でも行っているわけではない。一部の村は、78 年頃に自給用の米から送品作物に自分たちの意志で転換したと語り、別の村は 90 年代に行政の指導によって、商品作物を導入したという。米を混ぜて植えることも行政の指導によるという。ただし、一部の村は行政の指導ではなく、自ら米と商品作物を混ぜてより以前から植えるようになったという。また、一部の村では、これらを混ぜずに、ドリアンはドリアン畑に別に作り、米は焼畑で作るという。

さらには、米作りを今も中心に行っている村も少数であるがある。例外的に、灌漑設備をもち、水田での米作りが中心の村が 1 村だけある。この灌漑設備はある海外の N G O の援助によって作られたものだという。これによって二期作が可能となっているという。実際には、この地域の米は陸稲がほとんどで、天水依存の水田がごくわずかにあるにすぎない。これ以外に、米作りを中心とする村はわたしが調査したなかでは、最もバクセから近い村の 3 村と Km 19 の 1 村の計 4 村である。ただし、このうちの 2 村は土地が長年の利用でやせたためか、1 年間自家消費する量に満たない量しか収穫できず、これを商品作物の栽培ではなく、日雇いの賃金労働に就くことで補っている。

生産作物にも大きな違いが見られる。既に述べたように、標高 1000 メートルを超えるバクソンに近い村はコーヒーが中心となり、バクセに近くなればなるほど、低地となり気温が高くなるため、コーヒーの栽培が困難になる。コーヒーだけでなく、キャベツやマックスアワーなどの商品作物もバクソンに近い涼しい場所で盛んであり、低地になればなるほど、ドリアンやパイナップルをはじめとする果物や、ケームの栽培が盛んになる。ただし、多くの村で聞かれた最近の気候の温暖化により、生産作物にも若干の変化が起こっている。以前は気温が相対的に低く、ドリアンがならなかった村で、この 2、3 年、実をつけはじめているという。

しかしながら、こうした生産作物の違いを単に気候条件だけに還元することはできない。例えば、ドリアンは特に若木の間は水をやらないと枯れてしまうため、これを中心作物として、大々的に栽培しようとするれば、水蒔きのための井戸などの設備が必要となる。これには資金が必要となり、これを調達できるかどうかが問題となる。また、マックスアワーも最初に棚を作るためのまとまった資金が必要となる。家畜にしても同様である。子牛や子豚を買う資金が必要となる。したがって、こうした経済的な条件も生産作物の選択に大きく影響する。

先に、コーヒー栽培は比較的古くから行われていたため、現在も行われていると述べたが、フランス植民地時代よりずっと後の 1970 年代半ばにできた村でも、実際にはコーヒー栽培が行われており、必ずしもこうした歴史的背景だけが決め手となるわけではない。これは、当然のことながら、ボロヴェン高原に近いコーヒー栽培に適した気候であることに加え、周囲の古い村が行っているコーヒー栽培を模倣したものと考えられる。こうした近隣の村の生産活動を模倣するということは、農業以外にも観察される。Km 20 の村では鉄鍛冶をほぼ全員の男性が行い、これが重要な現金収入源になっているが、昔から行っていた活動ではなく、現在の村に来てから始めたという。一方、隣の Km 19 の村でも、鉄鍛冶が盛んに行われているが、彼らはかつてアタプーに住んでいたところから伝統的にこれを行っていたという。前者の村人たちは自ら始めたと言いが、前者が 1965 年、後者が 1950 年にできた村であることを考えても、前者が後者の村人たちの活動を見て、見よう見真似で始めた、いわば模倣したと考えるほうが自然だと思われる。

また、生産作物の選択にはより複雑な文化的とも言える要因がときに絡む。Km 19 の村は仏教とともに精霊祭祀を現在も保持しており、病気のときなどにニワトリなどの供犠を行っている。この儀礼には伝統的に壺酒を開けて飲むことになっており、現在も、この地域ではほとんど見られなくなった壺酒作りを行っている。壺酒の材料は米であり、この村が現在もドリアンやコーヒーといった商品作物とともに焼畑での米作りを重視していることには、こうした慣習の実践という文化的背景が関係しているものと考えられる。また、Km 48 の村では約 7 戸の世帯が焼畑を行っているが、彼らはわざわざ、親族の住むセコーン県タテーン郡に焼畑用の土地をもち、これを作っている。現在の村でもコーヒー栽培などを行っており、また距離的にも遠いため、頻繁に行くことはできないが、向うで農業労働者を雇うなどして、米作りを続けているのだという。なぜ、そこまでののかという質問に、村長は、商品作物作りだけでは安心できない、また親族との交流もたいせつにしたいということを理由として挙げた。商品作物栽培だけでは不安だというのは、言い換えれば、伝統的に主食である米を自分で作ってきた人々にとって、たとえ商品作物が天候や害虫などにより不作となっても、あるいは市場価格が暴落しても米さえ確保できれば飢えずにすむという安心感を得たいという心理ではないかと考えられる。わたしが行ったインタビューからも、コーヒー栽培を中心として行ってきた村人たちは価格の暴落や害虫の被害などを何度も経験してきたことがうかがえる。伝統的な米作りや、また遠く離れた親族との絆に対する執着などは、一種の文化的な要因といえるだろう。焼畑での米作りを中心とする Km 11 の 3 村でも、主食の米を確実に得たいという心理が垣間見られた。ただ、後者に関しては同時に、商品作物導入について具体案がなく、また資金もないため選択できないという要因も絡んでいることは否定できない。そのため、とくに 3 つのうち 2 つの村では、既に述べたように、焼畑での米の収量が落ちて商品作物導入ではなく、賃金労働者になるほうを選択する村人が多く見られる。

## 2) 森林利用

調査地域には、かつては森が多くあったことは村人たちのインタビューから知ることができる。そもそも、さまざまな集団がこの地域に住むことを決めた理由には、幹線道路沿いという地理的条件に加え、土地に余裕があったからだという声が聞かれる。1960 年代半ばにこの地域にやってきた村は、当時、自由に好きな場所を好きなだけ開墾し、切った木は売ったという。メコン河の支流からさらに枝分かれした小川がいくつも流れ、その周囲

には森が育っていたのであろう。当時は人口密度も低く、焼畑やスワンにする土地はふんだんにあり、この土地にやってきたラオのほとんどが、スワン用の土地を求めていたという語りからも、それがうかがえる。したがって、森林の管理を行っていたという形跡はまったくない。その必要性がなかったからであろう。森林資源もふんだんにあり、みな自由にこれらを利用し、これらをめぐって争いなどが起こることもなかったという。

しかしながら、現在は土地がふんだんにあるという状況にはない。人口が増え、当然のことながら利用されていない土地は確実に減少している。古くからの住民の土地が長年の利用によって痩せ、収量が落ちたため、彼らは新しく森を開墾したという語りも聞かれる。Km 23 の村では 96 年頃にそれまでうっそうとした森だった場所を開墾したという。そしてまた、政府による森林政策により森の開墾は自由ではなくなった。現在では、森を新たに開墾することは禁じられている。というより、一応、村の土地とされていても開墾が禁じられている区画が決められている。そのため、特に新しく来た世帯は、十分な土地の割り当てが受けられないケースが村によってはある。ただし、村や人口は 100 年ほどの間に徐々に増えたのであり、ある時期にいきなり人口爆発が起こったわけではない。このように土地が十分ないと住民たちが感じるようになったのは、比較的最近のことである。

この他、1980 年代半ばに始まる経済開放政策による市場の拡大が、商品作物生産を拡大させ、これが森林の伐採にも影響を与えているのではないかと考えられるが、今のところこれを明確に示す具体的なデータは得られていない。

さて、上に述べた現象は当然のことながら森林利用にも影響を与えている。そして、村ごとに、あるいは世帯ごとに森林利用の度合いに大きな差異が見られる。現在、利用されている主なものは、タケノコやキノコ、野草、大小の動物、そして森を流れる小川でとれる魚である。シカやイノシシといった大型動物は、一般に銃を用いて狩猟を行うが、現在では銃の使用が禁止されているため、村人たちははっきりとは語らない。また、一部の動物は狩猟禁止となっているため、公には獲らないと語ることがほとんどである。しかし、ある村で出された昼食にイノシシの干し肉が含まれていたり、別の村では偶然、シカの解体を目撃するなど、実際には狩猟が継続されていることは明かである。ただし、森が減少し、これら大型の動物はかなり奥地へ行かないと見つからないというのも事実のようである。一方、小鳥やねずみ、野鶏などは現在も獲れるし、獲っているという。

これらの森林資源をよく利用するかという質問に対し、村によって答えに大きな違いが見られる。例えば、Km 15 の村では、毎日のように森へ行き、食べ物を採る、森で採さなければ食べるものがないという返事がかえってきたが、一方 1 キロしか離れていない Km 14 の村では、森には食べ物がなく、ほとんど行かない、食べ物は市場で買う、森に行くのは年に数回、小川に水遊びに行くということだった。この違いは、後者が現金収入が多いため、わざわざ森に行かず、市場で食べものを買うと考えることができるかもしれない。実際に、後者の村はパイナップルに加え単価の高いドリアンの栽培を電気ポンプ井戸を導入しながら大々的に行っており、経済的には前者よりもおそらく豊かだと思われる。また、別の村でも、お金があれば森へ行かずに市場で食べ物を買うという語りが聞かれた。

しかし、それでは経済的にさらに豊かになるバクソーン近くのコーヒー園を行っている村では森で食べ物を採さないかということ、そうではなく、いくつもの村で森に食べ物を採しに行くという返事が返ってきたのである。つまり、経済的な豊かさ、あるいは現金収入の多寡が必ずしも森林資源利用の減少に結びつかないということである。森で食べ物を採さない理由として頻繁に挙げられるのが、森には食べ物がいないというものである。確かに、詳しく聞くと、場所によって天然のタケノコが豊富にあるところと、ないところがあるという。場所によってはまったく見つからず、その場合、人々は自分で植える。その一方で、天然のタケノコがふんだんにあり、しかも種類も多いという村もある。こうした条件の違いが確実にあるようである。また、利用する人が多すぎて、食べ物が見つからないという答えも聞かれる。確かに、数十年前とは異なり、村の数も人口も確実に増えており、同時に森自体は減少しているのであるから、地域のすべての人々が利用するに十分な資源があるとは考えにくい。わたしがかつて調査を行った村でも、かつて、タケノコを採りに行ったら、既に他の村人が採ってしまっていて残っていなかったという話を聞いた。誰もが自由に利用できる天然の森林資源は、いわゆる早い者勝ちで、採取され利用されてしまい、遅れて行った者は見つけることができず、市場などで食べ物を購入することになっていくのかもしれない。あるいは現金収入を相対的に多く獲得している世帯の人々は、この競争に最初から参加しなくなるのかもしれない。

それでは、既に述べたように、現金収入が確実に多い、コーヒーなど商品作物を作っている村でも、森で食べ物を採るという事実をどう解釈すべきだろうか。これは、獲得した現金収入をどのように利用するのかという選択に関ると考えられる。パクソーン付近の村の経済的豊かさは、車、オートバイ、携帯電話、電気製品などの保有数の多さに感じることができる。コーヒーや茶を栽培する世帯はこれらを製品化する機械なども保有している。したがって、彼らは現金収入をこうした物の購入にあてていると考えられる。そして日常の食事の材料は森で探し、一種の節約をしているのかもしれない。収入を単に消費にまわすのではなく、農作業に利用するための車や機械に投資するのである。「お金があったら、森にわざわざ食べ物を探しには行かない」ということばは、むしろ、収入を投資ではなく消費にまわすという行動様式の表れであり、投資という発想は欠如している場合もありえるだろう。

### 3) 村落間および世帯間の経済格差

上で触れたように、当該地域には一見したところ、経済的状况に大きな差異が存在するように思われる。単純に言えば、コーヒー園を中心とする村、特にボロヴェン高原の村が最も経済的に豊かで、焼畑での米作りを中心とする村が最も経済的に困難だという印象を受ける。その差異は、例えば、既に述べた車をはじめとする耐久消費財の保有だけでなく、家屋の様子などからも感じることができる。パクソーン近くの村では、伝統的な木造高床式の家屋に混じって、タイの近代的なコンクリート造りの家屋を模したような家は何軒も見られる。こうした家屋は、調査対象地域の他の村ではまだ稀である。

村落ごとの世帯あたりの平均収入などのデータは入手していないし、またおそらく家計簿や帳簿などをつける習慣もない人々に関して、これを把握することは極めて困難だと思われる。ただ、コーヒーやパイナップル、ドリアンといった具体的な作物を挙げ、これを売った収入が年間、どれくらいあるかという質問にはおおよその答えが返ってくる。インフォーマントの自己申告をもとに作成した表が以下のものである。

		[不作の年]	[豊作の年]	
K m15	パイナップル	200 万~300 万 K	400 万~500 万 K	(世帯平均)
K m16	パイナップル	300 万~400 万 K	2000 万 K	(世帯平均)
K m17	ドリアン	600 万	1000 万 K	(世帯平均)
K m19	ドリアン	40 万~50 万 K		(世帯平均)
K m36	コーヒー	9425 万 K		(昨年の一世帯の実績)
K m42	コーヒー	2400 万 K		(昨年の一世帯の実績)
K m48	マックスアバー	2000 万 K		(耕作面積 0.5ha)

K m 15、16、17 の村については、収量の少ない年と多い年と 2 つのケースについて、村落内の世帯平均の答えが返ってきた。一方、K m 19 の村は焼畑での陸稲作りを重視しており、ドリアン栽培に対する比重が相対的に低くなっていることがここでの数字に反映されているものと思われる。一方、コーヒー栽培中心の村では、収穫量が年によって大きく異なることに加え、コーヒーの価格も大きく変動するため、その収入も不安定だと思われる。K m 30 の村では、世帯あたりの年間のコーヒーの収穫量はかつて豊作のときで 3 トン採れたが、この数年不作が続き 400 ~ 500 キロ程度だという。一方価格は、かつてはキロあたり 2500 キープから 8000 キープの間で変動していたのが、この数年で価格が上がり、1 万 ~ 2 万キープの間で変動しているという。K m 33 の村や、K m 35 の村も同様に、収量の極端な減少を訴えている。表の数字は、村の一世帯の昨年の収量と売値を尋ね、これに基づいて筆者が計算したものである。K m 36 の村の副村長の世帯では、コーヒー園 11 ヘクタールのうち、5 ヘクタールがアラビカ種、6 ヘクタールがロブスタ種で占められるが、昨年度はアラビカ種が 7 トン、ロブスタ種が 500 キロ収穫できた。値段はアラビカ種がキロあたり 1 万 3000 キープ、ロブスタ種が 6500 キープだった。単純に計算して、この世帯は昨年、コーヒーによる収入だけで 9425 万キープあったことになる。これは、ラオス全体の世帯あたりの平均収入よりもはるかに多いといえるだろう。K m 42 の村の副村長の世帯では、

昨年、アラビカ種を 1 トン、ロブスタ種を 1 トン収穫し、アラビカ種はキロあたり 1 万 3000 キープで、ロブスタ種は最も高値の時期に、キロあたり 1 万 1000 キープで売ったという。この世帯のコーヒーによる昨年の収入は、2400 万キープになる。しかも、両者とも他の作物や仕事からの収入もある。前者は牛を 40 頭保有しており、またトラックを 2 台保有し、うち 1 台をパクセとの間を往復する乗合トラックとして運転手を雇って走らせ、これによる収入もあるはずである。一方、後者はコーヒー以外に茶の栽培もしており、これによる収入も年間 700 万キープほどあるという。Km 48 の村はコーヒーに加え、マックスアウの栽培を多くの世帯が行っており、表の数字は、耕作面積と収量、値段について得られたデータを基に計算したものである。これのスワンの面積は少ない世帯で 0.3 ヘクタール、多い世帯で 1 ヘクタールほどだという。この野菜は雨季は月 8 回（週 2 回）、乾季は月 4 回収穫可能であるため、多くの収入が見込めるのである。

ここまで、基本的に村を単位として論じてきたが、実際には村によっては世帯ごとにかなりの差異があることも事実である。特に、コーヒーを主たる作物とする村に世帯間格差が顕著に見られる。これらの村の特徴としては、世帯ごとに保有するスワンの面積の差である。コーヒー以外の商品作物の栽培を中心に行っている村や焼畑を中心に行っている村では、世帯間の耕作面積の差が 1 ヘクタールから多くても 3 ヘクタールまでの範囲内であるのに対し、コーヒーを中心に栽培する村の世帯間の耕作面積は極端に差がある。先に挙げた Km 36 の村では、副村長の世帯が 1.1 ヘクタール以上保有するのに対し、0.5 ヘクタールほどしか保有しない世帯もあるという。平均すると世帯あたり 1.5 ～ 2 ヘクタールほどだという。つまり、この副村長の世帯はほとんど例外的に大きなスワンを有しているということであろう。また村によっては、スワンをほとんどもたない世帯が存在する場合もある。

スワンの面積が小さい世帯がなぜ存在するのかをいくつかの村で尋ねたところ、たいていは労働力の多寡を理由として挙げる。労働力となる成人男性が少なく、老人や子どもの数の多い世帯である。またときには、なまけものだからという答えが返ってくることもある。彼らは、自分でスワンを作り、十分に面倒を見ることよりも、他人に雇われて草刈りや収穫の手伝いをして日銭を稼いだほうが楽だと思う人々だというのである。因みに、土地が足りないという答えが返ってくることはきわめて稀であった。

スワンの面積が小さく、他にまとまった収入を得られる職に就いていない世帯は、当然のごとく収入も少ない。こうした世帯の多くは、日雇いの農業労働者となって生計をたてている。彼らは、村落内で大きなスワンを所有し、人手を必要としている世帯に雇われるか、あるいは外の農園などに働きに行く。また、比較的最近の現象であろうが、タイに出稼ぎに行く者も出てきている。Km 36 の村では 30 ～ 40 人程度、タイへの出稼ぎがいるという。他の世帯に雇われた場合の賃金は、例えば、茶の収穫であれば、摘んだ茶キロあたり 500 キープ支払われるとか、草刈りならば、ヘクタールあたり 30 万キープといった具合に計算される。目安として、1 日あたり 1 万 5000 キープ程度という返事が最も多かった。最近始まった、ヴェトナムとラオスとの合併のゴム園で働くと、1 日あたり、交通費などの経費を差し引いて、2 万 5000 ～ 3 万キープの収入だという。ただし、そこでは給料の遅配が多く、辞めてしまう村人が後をたたないようである。1 日あたり 1 万 5000 キープの仕事を月 25 日行うとして、年間の収入は一人 450 万キープである。先に挙げた、Km 36 と 42 の農家のコーヒーによる収入と比べるとはるかに低い。

この格差は、単純にスワンの面積から自然に生まれるのではなく、そこにはより深い差異が存在する。既に述べたように、経済的に豊かな世帯は、得た収入を機械などに投資し、それによってさらに多くの収入を得ている。Km 36 の村の副村長は、コーヒー園の面積が広くなると、トラックなしではやっていけないと語ったが、実際は、スワンを大きくするには一定の先行投資が必要であり、これがあって多くのコーヒーを収穫できるのである。収穫したコーヒーを売り、これを再びトラックや機械などに投資し、さらに面積を広げ、さらに収穫を増やすことができるのである。いわゆる資本主義社会で当然のごとく行われていることである。一方、この原理を何らかの理由で採用しなかった、できなかった、あるいはもともとこれに関心ない世帯は、耕作面積を広げることでもできず（あるいはこれをせず）したがって収穫を増やすこともできず、結局は、前者に雇われる労働者となってきたのであろう。いわゆる、ごく少数の資本家と多数の労働者という村落内での階級の二分化が非常に顕著な形で起こっているのである。

では、コーヒー以外の作物を作っている村ではどうだろうか。パイナップルを中心に作っている Km 14 の村

と Km 16 の村では、貧しい世帯は森でタケノコや野草などを採り、これを売って生活するか、あるいは屋根を葺く草を編んで売って生計をたてているという。一方、Km 16 のもう一つの村もパイナップルが中心的な作物であるが、非常に貧しい 11 世帯は、他の家の草刈りなどをして生計をたてているという。また、わたしが、かつて 1 年間フィールドワークを行った村は、焼畑での米作りを中心としているが、村内部の他の世帯に雇われている者は一人もいなかった。老いた一人暮らしの未亡人もいたが、彼女は屋根を葺く草を編んで生計をたてており、他の世帯の草刈りなどに雇われることはなかった。世帯間で、播種などの際に労働交換が行われることは頻繁にあったが、賃金を払って労働者を雇うことはなかった。その後、村を 2004 年に再び訪れたとき、以下の話を聞いた。ある世帯の 30 代の男性がなくなり、妻と幼い子ども二人が残され、焼畑を続けることが非常に困難になったという。村長は村人たちに呼びかけ、皆でこの世帯の焼畑での農作業を手伝ったというのである。この村はもともと、世帯間の共同性や平等性をきわめて重要視している [中田 2004]。一部の世帯が別の世帯を労働者として雇うこと、つまり雇用関係という関係を世帯間に導入することは、村落内の共同性や平等性を冒すことになるのである。したがって、世帯が単独で焼畑の維持が困難になっても、別の世帯に労働者として雇われ日銭を稼いで生計をたてることは彼らにとって想定外であり、むしろ焼畑の維持のために協力するほうを選択するのである。

コーヒー栽培を中心とする村と焼畑を中心とする村の間には、単なる収入の多寡あるいは経済的豊かさにおける差異ではなく、より深く根本的な思考や価値観、もしくは世界観とでも言えるものの違いが横たわるように思われる。そして、商品作物であるコーヒー栽培を長く行ってきたことと、資本主義の原理に則ったスワン運営とが無関係であるとは考えにくい。P. ブルデューは、「計算可能性の入り口にアクセスすることは、主として生存の不安を乗り越えることができる収入を得ることによって示されるのであるが、これはディスポジション（傾向）の根本的な変容と同時に起こる。このディスポジションの変容とは、すなわち、行動の合理化が最終的な抵抗の場である世帯内経済へと広げられ、諸傾向は、計算と予測によって把握、制御される未来に従って組織される一つのシステムを構成することである」[1977:71] と述べている。コーヒー栽培によって、すべての世帯ではないにせよ、一部の世帯は「生存の不安を乗り越えることのできる収入」を獲得するようになり、その収入を「計算と予測」によって投資などに計画的に用い、さらなる収入の増加につなげてきたのであろう。価格の変動や不作、害虫の被害による収量の低下というリスクを伴うコーヒー栽培を、家畜や他のより安定した収入が見込める作物に投資することで補完するというやり方は、まさにこの「計算と予測」がもたらすものである。こうした「傾向」をブルデューは、時間と計算に対する前資本主義的な性質をもった、都市の零細小売商や貧農のライフスタイルや世界観と対比している [ibid: 73]。

焼畑での米作りを中心としている村人が、「生存の不安を乗り越えることのできる収入」を得ることが難しく、したがってこうした「計算と予測」を身につけることが困難であることは想像に難くない。そしてそこでは、「計算と予測」に基づく資本主義的原理とはまったく異なる原理、村の共同性や平等性という原理が卓越するのである。コーヒー以外のパイナップルなどの商品作物を作っている村では、コーヒー栽培を中心とする村に比べて、村落内で農業労働者と雇用者（あるいは資本家）という二分化はあまり進んでおらず、貧しい世帯の多くは一応、独立した他の方法で生計をたてているようだが、それでも Km 16 の村のように、村落内で雇われる農業労働者の存在を認める村もある。今後、こうした傾向はさらに強まるのかもしれない。

先に、森林資源の利用は、収入の多寡に還元することはできないと述べたが、そこには計算という要素が加わるからである。多くの収入を獲得したからといって、それをすべて消費にまわせば、投資が不可能になる。将来を見極めたうえで、さまざまな計算、予測を行い、計画をたて投資にまわすという選択をしてきたからこそ、例として挙げた世帯は広大なスワンを保有し、多額の収入を得ることに成功したのである。彼らが行う計算、予測は、森林資源の積極的な利用とまったく矛盾しないものである。しかし、焼畑を中心に行っている世帯による森林資源の利用は、貧困世帯によるそれとは、そのあり方や意味においてまったく異なるものなのかもしれない。

### 3. まとめと今後の課題

この地域に観察されるさまざまな点での多様性には、自然環境や、歴史的背景が少なからず作用していることは確かだが、それに加え、慣習という文化的要因もあり、さらには生産活動のあり方が人々のライフスタイルや思考様式、行動様式といったもの、すなわち傾向とも密接に関係しており、非常に複雑に絡み合っていることがわかる。ただ、現在のところ、細かいデータが不足しており、非常に大雑把な議論となっていることは否めず、今後、個々の世帯に関する詳細なデータや、経済開放政策との関係などに関するデータを収集する必要がある。また、宗教をはじめ文化的背景などの影響に関するデータも十分とはいえないため、これらについても今後、調査を行い、より厳密な議論を行いたい。

#### 参考文献

Bourdieu, P. 1977. *Algérie 60: Structures économiques et structures temporelles*. Paris: Les Editions de Minuit.  
中田友子 2004. 『南ラオス村落社会の民族誌：民族混住状況下の「連帯」と闘争』明石書店。

#### Abstract

This study, focusing on interactions among forest use and cultivation, social and economic change, and transformation of environment in Southern Laos, tries to demonstrate local people's practices such as reactions toward and negotiations with National and regional institutions or policies and natural environment. Although the diversities in agricultural products, system of cultivation, intensity of forest use, and economic prosperity, which are observed in the region, are partly caused by the historical and environmental conditions, cultural factor such as custom also influences on them. In addition, productive activities are closely related to people's lifestyle, way of thinking and behavior patterns, which are, in a word, dispositions. These various factors are complexly intertwined each other.



村	村設立年	中心作物	耕作形態	森林利用度(1)	主要民族集団	宗教(3)
ラック11、A	1946	米	焼畑	○	アラック、ラオ、スウェー	仏教
ラック11、B	1949	米	焼畑	○	アラック	仏教
ラック11、C	1966	米	焼畑	○	ンゲ、ラオ、タリアン	精霊、仏教
ラック12、D	1938	米、ドリアン、ケーム	焼畑	○	ニヤフン	精霊と仏教の両方
ラック12、E	不明	米、ドリアン、ケーム	水田	不明	ニヤフン	キリスト教、精霊と仏教両方
ラック13、F	1968	ケーム、米、チーク	焼畑、スワン	○	カトウー、ンゲ、ラオ、スウェー	精霊、仏教
ラック13、G	1968(78)	ケーム、ドリアン、パイナツプル、コーヒー	スワン	○	ンゲ	仏教
ラック14、H	1954	パイナツプル、コーヒー、ドリアン	スワン	×	ラヴェン	仏教
ラック14、I	1967	パイナツプル、ドリアン、ランブータン	スワン	△	ンゲ、タアオイ	仏教、キリスト教、精霊
ラック15、J	1951(57)	パイナツプル、コーヒー	スワン	○	ンゲ、タアオイ	キリスト教、仏教
ラック16、K	1961	パイナツプル、コーヒー、ドリアン	スワン	不明	タアオイ	キリスト教、精霊、仏教
ラック16、L	1952	パイナツプル、ドリアン	スワン	×	ラオ、ラヴェン、ブータイ	仏教
ラック17、M	1958(80)	パイナツプル、ドリアン、コーヒー	スワン	×	タアオイ	キリスト教
ラック18、N	1958	ドリアン、ランブータン、コーヒー、パイナツプル	スワン	×	ラオ	仏教
ラック19、O	1950(52)	米、ドリアン、コーヒー、ランブータン	焼畑、スワン	×	ラヴェン	精霊と仏教両方
ラック20、P	1965	パイナツプル、コーヒー	スワン	△	ラヴェン、ラオ	精霊
ラック21、Q	不明	ドリアン、パイナツプル	スワン	○	ラヴェン、ラオ	仏教
ラック22、R	1960	ドリアン、パイナツプル	スワン	○	タアオイ	キリスト教、仏教、精霊
ラック23、S	1945	バナナ、ブーキヤオ	スワン	×	タアオイ	精霊、キリスト教、仏教
ラック25、T	1949	バナナ、ブーキヤオ	スワン	○	アラック、タアオイ	仏教
ラック28、U	1953/54	コーヒー、ドリアン、バナナ、ブーキヤオ	スワン	○	ラヴェン、タアオイ、ンゲ、他	精霊、仏教、キリスト教
ラック30、V	1936	コーヒー、ドリアン、バナナ、ブーキヤオ	スワン、(焼畑)(2)	○	ラヴェン、ラオ、アラック、タアオイ	仏教、キリスト教、精霊
ラック33、W	1951/52	コーヒー、バナナ、ブーキヤオ	スワン	○	アラック、ラオ、スウェー、他	仏教
ラック35、X	1965	コーヒー、茶、ブーキヤオ	スワン	○	ラオ、ラヴェン、ヴェトナム	仏教、キリスト教
ラック36、Y	1955(?)	コーヒー、ドリアン、ブーキヤオ、茶	スワン	△	ラオ、ラヴェン	仏教
ラック38、Z	1942/43	コーヒー、茶、家畜	スワン	△	ラオ、ラヴェン	仏教
ラック40、a	1945(?)	コーヒー、茶、マーツクネー	スワン	△	ラオ、タアオイ、ラヴェン	仏教、キリスト教
ラック42、b	1975	コーヒー、茶	スワン	△	ラオ、ヴェトナム	仏教、キリスト教
ラック43、c	1936	コーヒー、キャベツ、シウガ	スワン	△	ラヴェン、スウェー、ラオ	仏教
ラック45、d	不明	コーヒー、マーツクサザー	スワン	△	ラヴェン、ラオ	仏教
ラック48、e	1930年代	コーヒー、マーツクサザー	スワン、(焼畑)	△	ラヴェン、ラオ、ヴェトナム	仏教、精霊

注(1) ○は毎日のように、あるいは頻繁に森へ行くと言ったものであり、△はときどき行くというニュアンスの答え、×は行かない、ほとんど行かないと答えたものである。  
 注(2) (焼畑)とは、一部の少数世帯のみが焼畑を所有しているケースである

注(3) 信仰している世帯の多い順に宗教の種類を並べている。精霊と仏教両方というのは、どちらかではなく両方とも同時に祭祀していることを指す。